

日本の英語教育

Junko Higasa

2012年7月8日の朝刊に、東京大学がグローバル化のために英語教育に力を入れるという記事が載っていた。要するに夏目漱石をロンドンに留学させたように、国に貢献する「英会話の達人」を養成するエリート教育へ立ち戻るといことだろう。でも教育した後にそれに見合った就職先は確保できるのだろうか？あぶれないだろうか？

漱石は明治14年(14歳)に漢学を学んだが「これからは英語が必要になる」と予測して16歳で英語を学び始めた。その後、東京帝国大学英文科を卒業し、熊本の第五高等学校教授(英語主任)であったとき、現職のまま当時の文部省から国費留学生として「英語を学んで来い」とロンドンに派遣されそうになったが、英語は国内で学べるので「その理由で行くのは恥ずかしい」と承諾しなかった。そのため「英文学を学ぶ」名目でロンドンへ留学した。そして帰国後、第五高等学校を辞し、東京の第一高等学校講師を務める傍ら、小泉八雲の後任として東京帝国大学講師を兼任した。ところがその卓越した英語力で文学論の講義は難しすぎて不評だった。しかし漱石が自発的に行った「シェイクスピアの講義」(芸術分野)は人気を博したようである。

日本では江戸時代から医学等で多少の英語使用はあったが、特に明治時代の文明開化以降、国際化を目指した政府が英語教育に力を入れてきた。しかし「国を担うリーダー」の就職口は狭き門である。英語堪能であっても多くは漱石のような教師の職か、学者・通訳・貿易の職しかないだろう。英語教育が発展しないわけである。使う場所が少ないのであるから。さらに日本では中学から8年間英語を学んでも会話ができない人が多い。何故なら学校で教える英語は実践であり役に立たないから。今流行りの「ネイティブにはその英語通じません」の世界である。私の知り合いの語学堪能者は「学校じゃ会話できないから」と学校以外のネイティブの教える語学学校に通った経験か留学経験を持つ。しかし留学して帰国した人の中には、国内の感覚と折り合わず就職が難しかった人もいる。英語を学ぶのはグローバル化の第一歩であるが、その言語と感覚を活かせる土壌があつてこそ真のグローバル化ではなからうか？

明治時代の最高学府「東京帝国大学」は国の人材を育てるエリート校で、当時はラテン語を理解できることが「エリート」の条件だった。漱石は英語の他にラテン語、フランス語、ギリシャ語を解する。何故ならその当時の学問で文献を読み解くには、これらの言語が必要だったからだ。明治時代の優秀な頭脳がどれほどのレベルであったか。またそこに到達できたのは、正しい日本語を使えたからである。そして漢学に秀でた漱石は「新陳代謝」等々現代日本で使われている幾つもの熟語を作った。現代でも語学堪能者と話していると、その日本語力に驚く。中には漢学に秀でた人もいる。実に日本人的な人が多いのである。決して「外国人もどき」ではない。漱石も「もどき」にはならなかった。そして明治時代の教育は必ずしも英語一辺倒ではなかったことが伺える。必要な知識を得て、実戦で生かせる言語であれば選択肢があつてもよいのではないだろうか？英語だけでどのようにアジアや非英語圏と折衝できよう？

漱石は明治の女子高等教育に難色を示したが、語学だけは別だった。三女の栄子さんはフランス語師範。漱石は「活用可能な言語」を見抜いていたのだろう。(2012.7.8)